

# 五光発條村井秀敏 社長

職人に誇りを持っている



## 町工場の職人が

精密バネをつくる五光発條(横浜市瀬谷区)は1971年に横浜市で創業。主に家電や精密機器の部品を作り続けてきたが、国内生産の減少で厳しい環境が続いた。その逆境をはね返そうと、低コストのタイ、ベトナム、インドネシアに進出。さらに、日本の職人の匠の技術を生かすため、バネを使った玩具やアクセサリーなど新たな商品開発も手掛けた。3代目社長の村井秀敏さん(43)は「100年先もバネを作り続ける」と頑固な職人氣質を見せる。

## 苦しいときに原点に戻ったら「光明」が見えた

「当社は主に線径2mm以下の精密バネを製造していますが、例えばフィルムカメラでは30〜40点使われていたバネが、デジタルに替わって15点ほどに減ってしまいました。さらに最近では、携帯電話の内部に、商品バネに特化する蔵カメラで事足りるの」と、自動車のバネが売れなくなり、14年2月期には国内外で約20億円の売上高にまで成長した。

「おもいがけないからネットを使ったのではなく、出資者の方々から「こういう製品が欲しい」「そこはちょっと違う」と意見を言ってもらえることがありがたいのです。また、クラウドファンディングやフェイスブックを使うと、瞬時に町工場同士がつながります。これまで大手メーカーの社員が旗を振ってひとつの製品を作っていました。これは町工場が横につながってモノを作る時代になる。ひとつひとつは小さいが、その分、みんなが社長ですから判断のスピードも速い。町工場という小ささがメリットなのです」

そのアクセサリーの資金調達先として村井社長が選んだのが、ネット上で資金を募るクラウドファンディングの「A-pro」だ。もっとも、単純にカネ集めのためだけでは発して売らないうえ、バネをつないで動物や戦車などをつくる玩具「スプリング」を開発。さらに、デザイナーの西村拓紀氏(35)と造形アーティストの志喜屋徹氏(46)のアドバイスを得て、バネでアクセサリーまで作ってしまった。

「従来の発想なら、バネとアクセサリーの組み合わせは絶対に思いつかなかったでしょう。私の作ったバネの玩具を見た西村さんや志喜屋さんが、バネの特性とは真逆のオシャレなアクセサリーを提案してくれました。この金属製アクセサリーを文化学園がファッションショーに使ってくれたら、既存のバネでも新たな商品が生み出せるので



## 「バネでアクセサリー」を作った 逆転の発想

「町工場の職人としての誇り」だ。「若い職人が「町工場でモノを作っている」と胸を張れるようにしたい。そのためには、大手メ

「従来は、携帯電話の内部に、商品バネに特化する蔵カメラで事足りるの」と、自動車のバネが売れなくなり、14年2月期には国内外で約20億円の売上高にまで成長した。

マンが学ぶべき点は多い。